

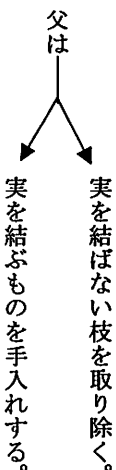
1 「わたしはまことのぶどうの木、わたしの父は農夫である。2 わたしにつながっていないながら、実を結ばない枝はみな、父が取り除かれる。しかし、実を結ぶものはみな、いよいよ豊かに実を結ぶように手入れをなさる。3 わたしの話した言葉によって、あなたがたは既に清くなっている。4 わたしにつながっていないなさい。わたしもあなたがたにつながっている。ぶどうの枝が、木につながっていないければ、自分では実を結ぶことができないように、あなたがたも、わたしにつながっていないければ、実を結ぶことができない。5 わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。わたしを離れては、あなたがたは何もできないからである。6 わたしにつながっていない人がいれば、枝のように外に投げ捨てられて枯れる。そして、集められ、火に投げ入れられて焼かれてしまう。

7 あなたがたがわたしにつながっており、わたしの言葉があなたがたの内にもあるならば、望むものでも願いなさい。そうすればかなえられる。8 あなたがたが豊かに実を結び、わたしの弟子となるなら、それによって、わたしの父は栄光をお受けになる。9 父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛してきた。わたしの愛にとどまりなさい。10 わたしが父の掟を守り、その愛にとどまっているように、あなたがたも、わたしの掟を守るなら、わたしの愛にとどまっていることになる。11 これらのことを話したのは、わたしの喜びがあなたがたの内にもあり、あなたがたの喜びが満たされるためである。12 わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。これがわたしの掟である。13 友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない。14 わたしの命じることを行うならば、あなたがたはわたしの友である。15 もはや、わたしはあなたがたを僕とは呼ばない。僕は主人が何をしているか知らないからである。わたしはあなたがたを友と呼ぶ。父から聞いたことをすべてあなたがたに知らせたからである。16 あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ。あなたがたが出かけて行って実を結び、その実が残るようにと、また、わたしの名によって父に願うものは何でも与えられるようにと、わたしがあなたがたを任命したのである。17 互いに愛し合いなさい。これがわたしの命令である。」

注―1―8節だが、1―6節が一つの段落を作り、7―17節が次の段落を作り上げていくとみるのが良いと思われる。ここではその立場に立って、読むことにしたい。

1―6節の構成

わたしはぶどうの木、わたしの父は農夫。



1-2節
父

あなたがたはすでに清くなっている、

わたしの言葉によって、

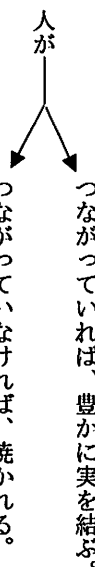
わたしにつながっていないなさい。

わたしにつながっていないければ、

実を結ぶことができない。

3-4節
私の言葉

わたしはぶどうの木、あなたがたは枝。



5-6節
人

① 1―6節と7―17節の二つの段落に分けられ理由は次の三つである。

② まずは7節以後になると、ぶどうのたとえ(1―6節)との関連が急に弱まることである。7節以後でわずかに残された関連は、7節「わたしにつながる」と8・16節「実を結ぶ」だけと言ってよい。

③ 次に7節以後には、1―6節節とは違って、告別説教(14章、15章18節―17章26節)のテーマが色濃く現れることである。特に目立つものをあげよう。

7節・16節「望むものはなんでも願いなさい」 (十四13―14)

8節 「父は栄光を受ける」 (十四21)

10節・14節「おきてを守れ」 (十四15、21、23―24)

11節 「これらのことを話したのは……」 (十六1、4、6、25)

④ 最後に1―6節は1節・5節の「わたしはぶどうの木」と2節・6節の「枝」によって囲い込まれ、一方、7―17節は7節・17節の「わたしの言葉」「わたしの命令」と8節・17節の「実を結ぶ」によって囲い込まれている。

⑤ 以上のことから次の推測も可能である。告別説教に特徴的なテーマをまったく含まない1―6節のたとえは、元来、独立したひとつのたとえだったが、後に7―17節が加えられ、現在の文脈(告別説教)に入れられた。この推測が正しければ、7―17節は1―6節節のたとえの解釈であり、しかも告別説教の文脈からなされた解説であると言える。

⑥ 1―6節のたとえから見よう。この段落で二人称複数が主語となる文章は、5節の「あなたがたはその枝である」と「あなたがたは何もできないからだ」(ただし、これは主文章ではなく、理由を示す従属文)を除けば、3―4節に集中している。もちろん、5―6節の三人称(「人」)は「あなたがた」のうちのひとりを表すだろうから、内容的には弟子への呼びかけであるが、直接に二人称に呼びかける3―4節とは違い、その呼びかけは間接的である。1―6節の構成を示せば前頁のようになる。たとえの目的は3―4節の呼びかけにある。この呼びかけで注意したいのは、「すでに清くなっている」である(この「清い(カタロイ)」は2節で「手入れする(カタイロー)」と訳された動詞と同じ語根の言葉である)。弟子が清くなるのは将来のことではない。「すでに」清くなっている。イエスが言葉を語る相手はイエスにつながる者である。その言葉が彼を清める。この言葉がイエスの語ったどの言葉であるか特定する必要はない。ぶどうの木であるイエスから枝である弟子に向けて流れる養分がすべて言葉と言われる。

イエスはぶどうの木であって幹ではない。枝も実も含むぶどうの木である。このことに関連して思い出したいのは、エゼキエル15章である。そこでは第二次捕囚直前のイスラエルがぶどうの木にたとえられる。旧約聖書でイスラエルはしばしばぶどうの木にたとえられるが、その場合、当然なことながら、実をならせるものとしてのぶどうが問題にされる。だが、面白いことに、エゼキエル15章のぶどうは、最初から実をならせるとは期待されてはおらず、ぶどうの木が何かを造る木材として役立つかどうかを問題にしている。エゼキエルによれば、イスラエルの現状は実をならせない、従って焼かれる以外には何の役にも立たないぶどうの木だとされる。こうして第二次捕囚の必然性を強調する。イスラエルは神から離れているので、実を結ばせることできない「偽りのぶどうの木」となった。そのイスラエルにイエスが送られ、実を結ぶ「真のぶどうの木」に戻るようにと招かれる。「真のぶどうの木」であるイエスにつながるなら、イスラエルは「真のぶどうの木」となって実を結ばせる。

⑦ 7―17節の構成は次頁に載せた。それを見ると明白なように、11節を中心とするコンチエントリックな構成を持つ。イエスの使信の中心は「あなたがたの喜びが満たされる」ことにある(④)。この喜びは「わたしのおきて(互いに愛し合う)を守る」とき与えられるのだが(⑤・⑥・⑦)、それ以前にイエスがわれわれを愛している、しかも父がイエスを愛したその愛によって愛している(⑧・⑨・⑩)。われわれは確かにおきてを守らねばならないが、それ以前にわれわれはイエスの愛に包まれている。愛の言葉に留まるとき、われわれは豊かに実を結ぶ(⑪・⑫)。イエスが働くからである。

わたしの言葉があなたがたの内にいつもあるなら、
望むものをなんでも願いなさい。
あなたがたは豊かに実を結び、
わたしの弟子となるなら、わたしの父は栄光を受ける。

父がわたしを愛したように
わたしもあなたがたを愛してきた。

あなたがたもわたしのおきてを守るなら、
わたしの愛にとどまっている。

これらのことを話したのは、わたしの喜びが
あなたがたの内にあり、あなたがたの喜びが
満たされるためである。

これがわたしのおきてである、互いに愛し合いなさい。
わたしの命じることを行うならば、
あなたがたはわたしの友である。

わたしはあなたがたを友と呼ぶ。
父から聞いたことをすべてあなたがたに知らせた。

わたしがあなたがたを選んだ、
わたしがあなたがたを任命した、
あなたがたが実を結ぶように、
父に願うものが与えられるようにと。
互いに愛し合いなさい。
これがわたしの命令である。

7-8 節
a

9 節
b

10 節
c

11 節
d

12-14 節
c'

15 節
b'

16-17 節
a'